百魔　続

1　天下無双の業物（わざもの）……441
2　幕末の先覚者沢新吾……446
3　甲州身延山中に隠る……452
4　捕われて江戸に護送……459
5　沢新吾奪還の苦心……465
6　信州の深山（みやま）に十年の佗住居（わびずまい）……471
7　星岡大角と大島に逢う……477
8　流転七十年の夢……484
9　久右衛門、間宮林蔵と相識る……491
10　「トンコロリ」の妙薬で大儲（おおもうけ）……497
11　楫取素彦、弱冠にして主命を果す……508
12　言語道断の攘夷論者……513
13　老勇夫、主家の宝器を売飛（うりとば）す……519
14　稀世の義人塩田久右衛門……525
15　「都寿司」の家主八田弥兵衛……532
16　玄鼎和尚奇特の法力……537

17 紀伊国屋次平の述懐……543
18 神刀無念流の達人逸刀斎……549
19 中国第一の剣士奥村左近太……555
20 弥太郎、逸刀斎の武者修行……561
21 旗亭大野屋の大騒動……569
22 阿羅波比神社境内の仇討……575
23 八田弥兵衛の陰徳……581
24 八丈島に無期遠島の刑……586
25 葛飾北斎の門に入る……592
26 勤王慷慨の士、蜂起す……598
27 八田翁夫婦四十二年振りの再会……603
28 勤王老剣客の末期……609
29 雲霞（うんか）の如く寄せ来（きた）る竹槍軍……614
30 一世の酒豪杉山信太郎……622
31 秋月騒動の嫌疑者となる……628
32 抜山蓋世の事業に志す……641
33 酔裏乾坤大壺中日月長（すいりけんこんだいこちゅうじつげつながし）……647
34 昔日に変る伊王島の一村長……653

35 六十有余年の徹底的生活……660
36 国家の大事に勇往邁進せよ……664
37 庵主が悪戯盛りの幼年時代……672
38 大声を発して幽霊に飛付く……676
39 荒馬を放って捕手(とりて)を詐(あざむ)く……688
40 谷村楊次、路上に庵主を打懲す……696
41 山間絶人の家にこの秘密事件！……700
42 庵主が常に敬慕する守本尊……705
43 老祖母臨終の長物語……710
44 家と屍を焼いて立退く秀子……714
45 絶世の美女と天成の悪少年……718
46 郡監、秀子の容姿に迷う……722
47 原田玄蕃、火中に狙わる……725
48 情に満ちた老僕の物語……727
49 仏宗次、死力を尽して秀子を救う……730
50 烈女、深讐原田玄蕃を刺す……734
51 噫(あゝ)抜群無双の女傑……737
52 木城老人の追憶談……741

53 花魁（おいらん）朝衣と情死を図る……745
54 死罪一等を減ぜらる……750
55 諸国霊山霊場の随方行脚（あんぎゃ）……756
56 幼若にして他郷烈寒の地に苦闘す……768
57 時の外務大臣榎本武揚を驚かす……774
58 中村精七郎氏成功の端緒……780
59 実兄山県勇三郎氏との義絶……786
60 大風浪を冒して二万円を利す……792
61 処世の要は之れ武士道の意気……798
62 日露開戦前の極秘の大活動……804
63 常陸丸遭難に纏る奇運……810
64 数千万円の巨利を犠牲にして……817
65 博多湾大築港の計画……823
66 金髪の一少女より熱烈の感謝状……829
67 『広文庫』完成の大恩人……835

百魔

続

其日庵 杉山茂丸 著

凡例

一、本書は、杉山茂丸著『百魔　続篇』（一九二六＝大正十五年十一月二十五日刊行初版本、大日本雄弁会刊行）を底本とし、その全文を収めたものである。本文の版は二〇〇六年書肆心水刊行『百魔　正続完本』のものを使用した。

一、底本は旧漢字・旧仮名遣いであるが、これは原則として新漢字・新仮名遣いに置き換え、拗音促音小文字表記を採用した。漢字と仮名の置き換えはしていない。

一、踊り字（くりかえし記号）の使用法、傍点の形状、送り仮名、仮名遣い、音便は、その表記揺れも含め底本のとおりに表記した（新仮名遣いへの置き換えに伴う踊り字の使用は原則として避けた）。〳〵〴〵は行を跨ぐ場合にも使用した。

一、句点は底本のままを基本方針としたが、読点は若干加減した。

一、底本の鍵括弧遣いとその包含関係は『「　」』であるが、これは「『　』」に置き換えた。本書における《　》は底本における（　）であり、また「『　』」内の括弧としても《　》を使用した。なお、底本における括弧遣いの対応関係と包含関係の乱れ等をいくぶん補訂した。

一、段落単位の字下げ表記は底本を踏襲したものである。なお、底本における段落単位の字下げ組みの意義を一行空けを以て代替したところがある（段落単位の字下げ組みが数ページにわたる場合など）。その他、適宜の一行空けを補ったところが若干ある。

一、「ママ」のルビ注記（原文のままの意）の用法は通例による。

一、底本の本文はいわゆる総ルビであるが（漢数字にはルビの省略が多い）、本書ではこれを選択的に採用した（漢数字にルビを加えたところがある）。底本ルビのうち外来語が平仮名で表記されているものは片仮名に置き換え、外来語のルビについては、アジヤ／アジア等の表記揺れを統一したものがある。

一、本文行内の（　）括り二行割注と（　）括りのルビは本書刊行所によるものである。

一、一行組の短歌の上の句と下の句の間の空白は本書刊行所が施したものである。

はしがき

『百魔』続篇の印刷が出来した事を三角学士より聞いた。元来此『百魔』の執筆は、日露戦争の終熄を告げた明治三十八年より始まって、今尚お之を継続して居る。即ち庵主の生存を証拠立てる精力試験の副産物である。人は皆官吏となり、商人となり、工芸家となって、善なり、悪なり、此火宅の現世に、一生懸命働いて居る。夫に庵主丈は、禅機や、哲理に中毒して、何事もせずに、人生生存の本能を休止し、只だ浪人と云う看板の下に、働かずにのみ居るのは、全く死んだと同じ事である。故に弥が上にも、忙がしき中に、十分間でも、二十分間でも、閑隙さえあれば、直ぐに原稿用紙と相対して、何事をか訳の解らぬ事を、思い出す儘書き散す事にしたのが、最早二十一年間となった。故に其文章の劣悪な事は、既に天下に公評ある事であるが、其書く主義は、或る意味の含まれたる、青年訓の積である。夫から其書いた材料は、正しく庵主が見聞した事、若くは古老や、先輩や、祖父母や、父母の物語を種とした、抜書きであるから、慥かなる事実である。併し人名や地名は、特に理由あって、隠匿変更せられてあるのもある。其の累積した原稿を、今回三角学士の、化学研究所に与えた結果が、斯くは書物となって、世に出るとの事であるから、どうせ碌な物でない事は、庵主が能く

識って居る。併し其文中に、何か少しでも青年者の参考に資する事があったらば、庵主は実に涙を以て之を感謝するのである。之を要するに、庵主は書物として世に公けにする目的で、始めから書いた物ではない、只だ門生共の発刊する雑誌の埋草に、其日々々と責立てられて書いた、甚だ粗慢な執筆である事を、繰返して自白して置く。夫が斯く刊行するようになったのは、彼の泥中に玉を索め、砂中に金を探る、三角学士の丹念と、清水剣仙翁の倦まざる校正力と、又夫を超越したる、講談社諸氏の出版狂とも云うべき、熱誠の集合力が凝って、斯る書物となり世に産れ出た事を、更らに繰り返して自白しておくのである。

大正丙寅の十一月落葉窓を拍つの日下渋谷の僑居に於て

其日庵主人手記す

1　天下無双の業物

山中の邂逅艶者を弔い
一介の乞丐旧事を語る

庵主が第一回の日本廻国をして居る時、即ち明治十七年頃、上州前橋の病院長山崎泰蔵と云う人に面会せんと、北国路より六日市、清水越、沼田を経て、前橋に向い道を急いで来る途中、腹痛の為め次の駅に着くまで、二里半も夜道をせねばならぬ事となった。

不知案内の山道と云い、殊に秋の半ばとて、落葉折敷谷蔭を、月の光りに辿りつゝ、往けども尽きぬ羊腸折、力と頼む一朶の、杖をこよなき友として、段々と山坂逕を下って来たが、

ふと草鞋の緒を踏み切ったから、早速新らしき物と穿換んと、振り分に背に負うたズックのカバンを開け、一足の草鞋を取出した。――今思うても可笑しきは、庵主の背にあるカバンの中には、靖献遺言と仏蘭西革命史と草鞋とシャツと紙類と薬と、繃帯などが同居して居たことだ。今時どんな意匠家を頼んでも、こんな配合は出来ぬ、又其の必要もない――側の大木の根元で草鞋を替んとすると、何の方面ともなくウーン〳〵と不思議な唸り声がする。はッと思いながら、身の用心に気を付けて、手早く草鞋を穿き、帯をゆり〆め、荷物を左手に提げ、右手に例のステッキを携え、辺りを見廻しつゝ、其唸り声の出所を物色した。

すると、其道を二間斗行って左へ曲る、往来より三間斗奥に、小やかなる山神の祠がある。其処に焚火がトロ〳〵と燃えて居る。何でも其辺だと思い、例の冷飯好きで段々と近付いて見れば、二人の乞食体の者が、折り重って踞んで居る。はゝあ、是は非人の病人だな……と思いつゝ近寄ると、一人の老人は非常に驚異の目を以て庵主を迎え、立上ろ

うとするから、庵主は声を掛けて、
「いや、驚くに及ばぬ、往暮れた旅人である。あれなる道を通行の際、妙な唸り声がするから、此人里離れた山中に、奇異の思いをなして、思わず来た者であるが、お前等は一体何人であるか？」
と問うと、其老人少し落付いた面持にて、
「私共は世に住家と云うものを持たぬ非人で御座ります」
と云うから、
「俺もそうかと思うたが、一体唸り声は何であるか」
と問うと、其老人は緊張した鋭き両眼に、一杯の涙を浮べ、
「いや、夫は是れなる忰が、臨終の唸り声で御座ります」
と答える。庵主もぎょッとしたが、直に同情の念が湧き、ずか〳〵と立寄ると、又第二のぎょッとが来た。夫は其辺一面の血潮である。
「是は何の為めの血潮か」
と、やゝ慌て気味で聞くと、老人は平気で、
「何れ肺病とでも、申すもので御座りましょう。忰は一二年前から病気で御座りまして、時によっては歩行も出来ませぬ位で御座りましたが、近来大分元気に成りましたから、予ての望みで御座りますので、親子同道にて越後路へ出ようと思い、前橋を出ました途中から、俄かに体が悪くなり、辿り〳〵て此所まで参りますと、最早一歩も引けぬように成りました。昨晩方から此辻堂に居りますが、其時から苦み通しで先刻多量の喀血を致まして、今を限りと相成りました。野山の草と諸共に、秋には凋む野伏りの、非人冥利の境涯も、親子一世の別れには、又一入の思いが致します」
と云うので、庵主は手早くカバンから、例の熊本の毒消丸を取出し、彼が持つ竹の吸筒の水で、其病人に与えると、眼を開いて黙礼をしたが、間もなくがっくりと絶命した。夫れから老人は暫く瞑目して居たが、やゝ有って立上り手早

く炬火を拵らえ、其辻堂より五六間もある処に、自然の凹んだ小谷のような処で、頻りに柴の枝を切って行儀よく並べ、忰の死骸を抱えて、其柴の上に仰向けに寝かし、又其上に沢山の柴の葉を置き、せっせと左右の土をしゃくり下して、それを蔽うて居る。庵主も通り掛りの事ながら、下地の物数寄と行掛りとで、全く視て居る訳にも行かず始終夫を手伝って、其窪地の大体平になるまで土を掛け、其上に一本の折柴を立てゝ大声に引導を渡した、

今此三界　皆是火宅　其中衆生　悉是吾子
而今此処　多諸艱難　唯我一人　能為救護

と遣った。此乞食の亡者は、此結構な法華経の引導で屹度成仏したに違いない。其間老人の乞食は、大地に手を突いて黙念として居たが、漸くにして声を曇らし、

「計らざる旦那様にゆくりなくお目に掛りまして、此忰の臨終にお薬を頂き、其上に結構な御引導を頂いて、親と致しましてこんな忝い事は御ざりませぬ。有難う存じ上げます」

と、お礼を云うから、

「いや、お前さんの心中は察するが、浮世の中の有様は、決して差別は無い物である。都の空も深山路も、秋は均しく紅葉する世の理りを弁えて克くあきらめるが、菩提の第一である」

と、説き聞かした。夫から其老人は燃え下った炬火を打振って、又、元の辻堂に道しるべしたので庵主と共に来ると、老人は頻りにそこらを綺麗に片付け更らに焚火を焚き付けた。月は皎々として中天に冴え渡り、山峡百里の眼界を照して居る。庵主は何だか、其老人一人を置いて行くのが変な心地がし、其老人も何だか、頻りに懐かしそうな顔付をして居たが、先に往ても後に行ても、二里や三里の間は人里もない深山の中の辻堂に、図らず出会った老乞食と、天が下の浮浪人と相対した所は一種の劇景である。

谷川の水は岩に堰かれて遠く近く響き、名も知れぬ夜鳥の啼叫ぶ声は彼方此方に聞える。夜の更くるにつけて凄惨の気は、次第々々に襲い来るかのように思われて来た。其中にふっと庵主の目に付いたのは、老人の傍にある穢ない短刀

様のものである。考えれば最前から柴の枝を切り集める手捌きは尋常でなかった。又、土を掘るにも大変早かったようだ。十六歳の時から刀の事で、廃嫡の刑にまで処せられた程の庵主である。其まゝ見遁すべき筈はない。黙然として居る老人に、

「一寸其傍の山刀様の物を見せられよ」

と云うと、慌てゝ之を匿そうとする。庵主は直に居座姿を直し、

「いゝゝこれ御老人、小生は先刻より貴下の御様子に付き、頻りに注目して居ましたが、今其短刀の拝見を申出るのは、啻に小生の希望のみならず、貴下の御本懐とも存ずるからで御座りますよ。多大の御迷惑でなくば、枉げて拝見を許されたし」

と、膝に手を置いて、厳然として云い放った。すると其老人は、暫く庵主の顔を見詰めて居たが、黙した儘其短刀の真中を握って、すーっと庵主の前に差出した。仍て庵主も襟を正して受取る。謹んで之を一見するに、火吹竹の様な二タ節竹を、二つに割って刀身を入れ、夫を苧殻で巻き立てある。押戴いて鞘を払えば、真黒に錆ては居るが、巾広き平打の一尺足らずのもの、表に鏨深く真の倶利伽羅龍が彫ってあり、裏に深き護摩箸が通って居る。重ね薄手にして真の棟である。何様刃も地金も分らぬので、許を得、竹の目釘を抜いて中心を見る、素より錆はあるが鏨痕が見ゆる。火を吹いて能く之を見れば、表に相州住対馬守綱広と云う珍らしき銘、裏に天文六年二月日、沢修理太夫忠正の為之を作ると、鮮かに読まれる。庵主は之を見てあっと感嘆した。是れぞ初代綱広の丹誠込めた誂打で、天下無双の業物である。之を所持する「此老人こそ奥床しき隠士なれ」と思うたからだ。

夫から庵主は、其短刀を元の如く納めて老人に返し、物静かに、

「仇雲の陰に宿れる月影や、霞の外の桜花、何れ眺めを遮りて、名所知らぬ旅人は、有や無しさえ知らずして、心なくも通り行く。小生今日何の天縁か、寒渓疎林の間に於て、斯る奥床しき御老人に邂逅するは、一期の大慶此上なし。願くは御身の上を明かし玉え、小生は九州福岡の藩士、小禄皷柝の家に生れし青年なれど、聊か世に憤る事あって、斯

は雲水蓑笠の途に漂うので有ります」

と、尋ね問えども最前より何処までも押黙って居た老人は、両眼より一種異様の光りを放ち、庵主を見詰めて居たが、粗朶一攫みを焚火に投じて、膝を刻んで躙り寄り、

「二日の流連、三日の乞食止むるに難き人情の弱点とは聞つれど、拙者も今は三年の非人稼ぎにて素より包むに難からずと、思う油断は忽ちに貴下の慧眼に見破られ、纔かに残る一口の、短刀の為身の素性を、語るも憂しと顧る。そも過ぎ越しの旧事を、何と今更岩躑躅、咲き出る世もあらがねの、地に伏し天にあこがれて、斯る境界と成る身こそ、幕府の旗本、林佐渡守が二男にして、沢主水が家名を継ぐ、新吾治明が成れの果てに御座ります。即ち此短刀こそは養家の遠祖修理太夫が、数度の戦場にて武名を鳴らせし業物にて、今は野末に薪こる、山刀にも劣る哀れさを、見るも涙の種ぞかし。一樹の蔭の宿りにて、世を憤る御方と聞くに付けても今更に、我身の上の偲ばれて、語るも奇しき経事を、包まずお咄致す事に致しましょう」

と、話出る物語りは、今大正の天地には、夢にも見えぬ珍談にて、庵主が拙なき筆をもて、書き彰わさん事はしも、また一入の難事なれど、生れて二十一ケ年、今より三十五ケ年前、親敷聞きし物語を、書かずば其儘湮滅して、尋ぬる由もなかるべしと、風漏る秋の寒席に、孤灯を前に頤を、支えて後先き思い出す儘、筆を馳する事とはなしぬ。

因に曰う、此沢新吾の事及林佐渡守の事に就いては、去る明治二十三四年の頃、芝区日蔭町浜の屋の主人、茶幸と云える老人、純粋の江戸子にて、殊に旧幕中よりの御用聞なりし為、各旗本の事蹟等に委敷、庵主が彼の乞食より聞いたる端々、記憶を探りて咄し出すと、茶幸老人非常に悦び、沢家は丁度自分の出入先にて、十七八歳の頃より見聞して、其記憶にある事は素より、分らぬ事共は老人仲間の朋友にも聞糺して呉れたので、当時一入面白く感じた。又、後藤猛太郎伯の家令、林次敏氏は、正統なる林佐渡守の子孫にて、事歴を尤も委敷物語られたので、茶幸老人の話と共に、其の頃庵主の咄の裏書となったものである。今にても八十前後の純粋の江戸っ子の老人ありて、此記事を一読し、

復た第三の裏書をして呉る程、事蹟を委しく記憶する人あらば、一層面白き事ならん歟。

2　幕末の先覚者沢新吾

一片の侠心冤死を救い
二侠気を以て窮死を脱す

前回に云う如く此乞食の老人こそ、即ち幕府の旗本沢主水の養嗣子たる、新吾治明其人である。此時六十七歳と云うて居たから、丁度文政の初め頃に生れた人であろう。世は弥長き徳川の、恵の風に稲葉打つ、静けき四方の民草も、幾百年の太平に、埋る種の目を萌やし、天下の人心漸くに、我日本の外にまで、学び心の馳せ通う、嫩葉と見えて外国の、飜訳書などが段々と、出来てきたのである。文政三年には高橋作左衛門、満洲文を飜訳し、同六年には独逸人シーボルト医書を長崎にて講訳し、同七年には足立左内、露西亜学筌訳を著わし、同九年には高橋林寛、露西亜の書籍を飜訳して幕府に奉ると同時に、青地林宗も亦気海干満輿地誌略を著わし、同十年には伊藤圭介、始めて物理書を飜訳し、同十三年即ち天保元年には、足立長春、西洋産科学を著わし、同四年には宇田川榕庵、植物学を著わす等、我国人心の啓発機たる、グリーイン・ハウスの煖室炉とも云う可き、諸々の飜訳書は陸続として世に行わるゝに至ったのである。多年智動を禁じ、愚守を政策とした徳川の天下も、天となく地となく、頻りに異様の音響を発して、上下不安の念に打たれたが、其間文政元年と五年とには、蘭人を聘して其説を聞き、将軍家斉の左大臣となったる途端には、何とも知れぬ異船が浦賀を窺い、同じく七年と八年とには、英船薩摩の宝島と陸奥の海岸とを窺い、同十年にやっと将軍家斉が太政大臣になるかと思うと、九州と北国とに大地震と大洪水があって、大騒動をなし、其翌年には松平楽翁の卒去と共に、江戸は大半を失う程の大火事である。此故に徳川斉昭は盛んに海防の術を講じ、幕府は復た異教と海外貿易とを禁じて、

内政の釐革を務めたのである。扨て彼の沢新吾老人は、此間に生れて顕吾最も群を抜き、時務を知り事理を能して、頗る人心の帰向を察し、夙に海防事務官、渡辺登等と時勢を談じて世態を反正せんと勉めたのであるが、折柄沢家の用人、倉橋惣右衛門と云える者、若主人新吾殿が異書を読み異教を信じ、勤王異心の京都の諸公卿衆と気脈を通じて、行状甚だ宜しからざる云々の密訴をなしたので、直ちに新吾は水道町沢家の別墅に蟄居閉門の身となった。引続いて表面は屠腹、実は庭上の斬首に処せらるべき沙汰極まりたるを知って、老中の或る一人は、大いに之を痛惜し、窃かに腹心の大名松平相模守勝権に内嘱して、沢新吾を救命するの方法を一任したのである。当時江戸在藩の勝権は、天性の侠義抜群の人なるが故に、用人の平野数馬と共に、肝胆を砕いて其事に従事したのである。抑〳〵此松平相模守と云える人は、下総国香取郡多古の城主にして、其高二万二千石を領し、菊の間朝散大夫を勤め、曩祖松平豊前守勝政四代の孫にして、江州彦根の城主井伊掃部頭直弼の舎弟であって、松平家に入嗣した人である。斯る縁統あるに拘らず、切に幕府の政道を憂い、窃かに天下の大勢に着眼する曠世の義人であった。斯る人が此沢新吾所斬の事を聞くのみか、之が救命を属せられたのであるから堪らない。恰も隼の藪雀を聞いたように、其忠臣、平野数馬と共に、此一大事を実行する事に取掛ったのである。勝権は先ず人を派して、沢家別墅の内外を覗わせたが、其門前と門内には、見張の番人詰合い、室内にも詰所あって、左右の茶坊主給仕人等を指揮して、新吾主人の挙動を覗うて居る。何とも蚊とも外界よりは手の着けようがないのである。時は天保九年十二月五日寅の上刻、幕府の評定一決して、検使松平大和守斉典に、根村隠岐を差添えられ、一隊の警固と共に、六葉葵の高張を前に進ませ、水道町の沢屋敷へと乗込むのである。事既に是に至っては、如何なる天魔鬼人でも此新吾主の命を助ける事は出来ぬのである。

沢家に於ては、検使来向の準備おさ〳〵手落なく、やがて新吾殿お召換と云うので、手水の為め湯殿に入り、小坊主一人女中一人之に付添行きしが輙時経っても出来らざる故、用人石田伊織、心もとなく化粧の間を窺い見しに、ぎゃっと斗りに早腰も打抜さん斗りに打驚き、「出合い召され」の呼声に人々駈付け之を見れば、小坊主は袈裟に切離され、女中は首のみ畳廊下に転がり、骸は化粧の間に倒れ居れり。其室の中央に白羽二重三枚の衣物に、濃浅黄紋付の羽織を

覆いたる、首なき死骸下伏になり居れり。其前に中奉書の全紙に一通の書置あり。曰く、

新吾儀無法の御不興を蒙り残念に心得、只今絶対絶命と相成候間雪隠にて切腹仕畢。

戊十二月五日　　治明無判

御検使大和守殿

此は素より新吾主の自筆でもなく、殊に其覆われたる衣服を取り除くれば、茶の盲縞の衣物に、仙台平の袴を着したる士が、美事に腹一文字に掻切り、石地鞘大目、菱柄の脇差を右手に持った儘打伏して、死んで居た。他の兆候にて考うれば、年頃四十格好の武士なるべしとの事、こは〳〵如何にと一同惘れに惘れて居る所に、最早検使参着となりたる故、万止むを得ず、用人石田伊織、古川善右衛門は、恐る〳〵添役根村隠岐まで、有の儘を内申したので、其驚きも亦一通りではない。直に早打を以て、老中へ右の趣急報に及んだが、居合の老中評議の上、追捕の手当を町奉行へ申達せんとする一刹那、彼の世に有名なる天保九年十二月五日、西の丸炎上の大珍事が勃発した。江戸詰合の諸国諸大名は、皆武装して出馬する有様にて、時節柄、武家、町家とも人心甚だ穏かならずとの事である。丁度立往生の姿となって居た、沢邸の検使大和守は、沢新吾切腹の検使相済んだる体に取拵え、一応引揚げ来れとの命なりと、根村隠岐の再報によりて、一同すご〳〵帰宅したのである。此大火は南風烈しく、逆の飛火は日比谷見付内の諸大名屋敷を焼払い、一方神田一ツ橋より、甲賀町を焼抜き、お茶の水にて焼止ったとの事である。一方、沢邸の出来事は、一体如何なる次第かと云えば、相模守勝権は、満身の智脳を傾けて考えても穏便の手段を以て沢新吾を救命するの工夫が付かない。そこで腹心の家来、平野数馬に内談した。素より大勇無双の忠臣平野数馬であるから、

「薄生暖き武家奉公、此太平の垢に溺れ、命の始末に困じた私、斯斗りの事に御賢慮には及びませぬ、数馬、命に代え思召を仕おおせましょう、併し今一人手代として、同役雀部伊八郎を御差添え下さりませ」

と云う、此雀部伊八郎と云うは、千葉龍雲斎の高弟にて、剛胆にして義気強き武人である。相模守は直に雀部に此一大事を委嘱したので、両人は厚く主人の知遇を謝し、其前を退きて段々と沢邸を覗うたが、水も洩らさぬ程の警衛で

ある。其内検使参向の噂を聞いたから、もう絶対絶命で、平野は雀部に斯く云うた。

「沢新吾殿の賢明は、幕府の為めに惜むと同時に、又天下の為めに惜むのである。全く養家の家政治まらず、家人に悪心野望の者多く、様々の密訴が累をなして、此迷惑を来したものである。身を殺して仁をなすは、武士の本分、御主君の御内示、又是にあるのである。我等陪臣の軽輩、此死場所を失うたら、永劫武士らしき死様はもう望まれぬのであるから、どうか快く拙者を死なせてもらいたいがどうじゃ」

「夫は万事貴殿に都合好き事斗りであるが、拙者は一体どうなるかな」

「そこが相談じゃ、貴殿は貴殿で、又面白き死場所を見付けたら、何とか宜い都合も付くであろう、拙者は決して貴殿と功を争うのではない。拙者が直々命ぜられた事の添役に、貴殿を願うたのであるから、貴殿は拙者が十分なる満足を得るように、助けて仁をなさせて呉れるが、貴殿の武士ではあるまいか、どうじゃ」

「成程、何だか総て引合ぬ事斗りのようじゃが仕方がない、貴公のお指図通りに遣りましょうよ」

「千万忝い、然らば先こうじゃ、何にしても明日は検使御参向との事じゃから、今夜中に何とかして新吾殿の寝所に忍び込み、何かの隙に新吾殿を逃がして、其寝所で新吾殿の衣服を纏うて、拙者が代腹を切る故、貴殿は直に拙者の首を打落して、夫を持って新吾殿と共に逃亡して下さい、夫からどうか拙者が腹を切るまでに、妨げする者があったら、斬払うて貰いたいものじゃ」

「そう味く行くかどうか分らぬが、夫より外に道がなければ遣るより外仕方がないよ。夫では兎も角、今夜中に握飯を二ツ三ツ持って、沢邸に忍び込む事に仕ようよ」

と、共に相談一決して、雀部、平野は同道して、芝の田町の馬問屋に行き、水戸藩の士と云うて、栗毛と芦毛の馬二疋を買い、安鞍を置いて之に乗り武家遠乗の振を粧い、小石川護国寺内の林の蔭にある、伴待厩に之を繋ぎ、十分の喰み草を与えて水戸家の士と云うて寺の小者に頼み置き、即ち十二月四日の薄暮れより、沢邸の四方を覗うたが、丁度沢邸の裏隣家堀内家の掃除口より植木屋の出る間を見済まして摺れ込み、夫から沢家の湯殿裏の生け垣の木一本を切り

て、十分の出口を拵え其処に雪風を凌ぐ為めの赤合羽二つを置き、忍び入ったのは湯殿の通用口である。夫から丁度化粧室の次の間、三畳計りある室に、屏風や襖等の入れてある、其蔭に潜んで其夜と翌日昼すぎまで待ったが、夫までにも万一見付られたら直ちに両人とも腹を切る積りで、十分の用意をして居ると、間もなく俄かに屋敷中が騒がしく成って来た。夫は検使の乗込前だからである。さぁ張りに張った網は、魚が掛るか掛らぬかの瀬戸際となったのであるが、輙子の下刻ともなる頃、沢新吾殿は召使二人を引連れて厠に入り、直ちに化粧室にて衣替えの用意である。其処に平野と雀部は次の間よりつか〳〵と進み出で、両人畳に平伏して、

「沢殿へ申入奉る、御老中の御一人、深く君の賢明を慕い、御冤死を惜ませ玉い、手前共主人へ御内旨を賜わり、如何様ともして御救命致し申すようにとの御事でござる、主人事も厚く将軍家の御為を存じ、天下の御時勢をも相考え、枉げて御助け申上たき所存、私共へ申含めました故、両人一同死を決して、昨夜来御寝所間近く忍入り、拝顔の儀をお待申居ました事、窮迫の砌、簡略の言上、陪臣の無礼、平に御宥免を蒙り、速に此処を御立退きの程願上ます。夫にお控えの御付添の御両人共、何卒此事穏便に御聞置を願上ます」

と云い終らざるに、小坊主と女中の両人は、容易ならぬ事と思い、あれと云う儘立上った時はもう雀部、平野が一呼吸に閃めいたる刀の冴えで、両人共真二つになって居た。之を見たる新吾主は已に、どかんと魂が据った。

「何れのお方は存ぜぬが、御芳志千万忝し、併し養家の瑕瑾と、君命の重きは、武士に逃るゝ道もなし、唯御推察を乞うのみである」

と、此言未だ終らざるに、平野数馬は諸肌濡げ、已に屠腹を了ったのである。右手を下に清やかに斯く云うた。

「重ねて申す手前主人の申条は、幕府の不埒暴政は、軈て天下の疎みを受け、頽顛の時遠からず。此故にこそ無駄死をお止め申す。将軍家の御為め、天下のお為め、是非共御助命あれかしと申さるゝのでござりまする」

と云う声の下より、雀部はどっかと坐して、

「お分りなければ私も生きて為すべき道もなし、二人共々相果て申す、只管御覚悟を願いまする」

と云う両人を見詰めて居た新吾主は、

「咄嗟の問答、黒白を弁ぜず、去ながら人は死を以て誠とす、和殿両士の挙動は、新吾ほと〳〵感歎せり、今一時の後は検使の入来、白駒も影を止むる隙なし、先ず取敢えず勧に従い夫を死すべき道と定め、君国の為め機を選み其時死して恥を雪がん」

と云う時は早や平野の笑顔、雀部が後に廻るが最後で、首は已に落たのである。雀部は直に側にある新吾主の着替として用意ある衣類を、羽織の儘平野の死骸に打覆い、軈て用意の一通を（此嘲弄に斉しき書置の事は、当時幕府の威光衰えたる第一の証拠として、多く諸大名の間に持て囃されたとの事である）前に置き、首を提げ新吾主の手を執って早足に湯殿の通用口より、生垣の下を潜り、用意の赤合羽に騎上笠を眉深に冠り、彼の裏隣の堀内家の掃除門より往来に出で、直に護国寺内に馳せ入りて、昨日預けた馬引出し、乗るが其儘鞍上人なく鞍下馬なく駈出し、大塚口より練馬街道、雪を蹴立て、遯れ去り、影も留めずなったのである。

是まで聞いた乞食老人の物語、夜は森々と深け亘り、月は中天に白く冴え、おどろに燃る生麁朶の、烟は長く影暗き、林の中に靉靆て、大蛇の舌を伸ぶるが如く、半斑に乱るゝ髪鬚の、間に光る両眼は、安達が原の黒塚に、棲みける鬼に等しかる、此野伏りの老人が、六十余州の外様大身、輿立させた式礼で、素通り出来ぬ直参の沢主水亮忠政とて、大廊下格式の、加賀に斉しき家柄の、若殿様とは仇し世の、夢にも見られぬ思いがするのである。

庵主曰く、此沢家に関聯せる、某子爵家の事を、亡師山岡鉄舟先生や武揚榎本子爵に尋ねたら、素より庵主が生れぬ前の古事で、幕末瓦解の折の沢新吾氏の身上話程面白き事は無いとの事であった。読者回を追うて此伝を読まば、或はむゝ成程と首肯せらるゝ事もあろう。

3　甲州身延山中に隠る

忠臣義情に依って故郷に帰り
明君士道を説いて雀部を諭す

沢新吾と雀部伊八郎の二人は、汗馬に鞭とあおりを掛け、出来る丈けの脇道を廻りて、八王子附近の八日市に辿り着きしは、薄暮頃の事であった。兎ある棒鼻の旅亭に入りて、両人とも行装を変じ、或は旅商人、或は浪人の姿となり、とう〳〵甲州巨摩の山中に分け入り、辿り〳〵て鰍沢に出で、此所に足を止めて、世間の動静を探りしに、追捕の評判穏かならざるより、又々両人相談の上、とう〳〵身延の山中に潜入したのである。抑此の甲州の身延山と云うは、文永十一年、僧日蓮鎌倉より身を脱して此山中に入り、草庵を結んで独棲せり、邑主波木井六郎実長と云える者、深く日蓮に帰依し、終に弘安年中に至りて、一宇を建立し、是を身後寿蔵の地となす。日蓮の歌に、

うつぶしにさのみは人の寝られねば
月を身延のおき返るらん

と云うが如く、北は天の橋立、南は鷹取山、西は七面山と、恰も鶏足鼎立の如く、鉄門の形を成せり、東は天子が岳を隔てゝ、四方屏風を立てたるが如く、南北は早川波木井の大河ありて、激湍箭を射るが如く、大石巨岩も、枯れたる草木を流すが如し、此山峡狭少の地に日蓮は庵を結びて、日夜読経に三昧す、昼は日光を見ず、夜は月影を眺めず、巴峡の猿声常に絶えず、懸河の流叫鼓鳴に似て、心意為めに澄徹するのである。此身延山の南方に当りて、久遠寺あり、